



写真1)「あえてよかった」は仮屋さんの一番好きな言葉。2) 生徒の個性で溢れる映画になった。3) 地元施設ののじりこびあも協力。4) 喜び合う生徒たち。撮影した佐藤さんは「子どもたちの笑顔が魅力的で楽しかった」とほほ笑む。5) 衣装や化粧は生徒が考え制作。6) 運動会でも撮影を行った。7) 友情を育むヒューマンドラマだが、随所に笑いも散りばめられている。8) 佐藤さんが編集を手がけ、さまざまな効果を付けたことで完成度が高いものになった。9) 紙屋中全校生徒と教職員。後列の一番右が佐藤さん、その隣が假屋先生。

6	4	2	1
7	5	3	
8			
9	写真		



紙屋中自主制作映画 あえてよかった

林 小人
こばやしびと
Vol.46

写真提供 / 佐藤哲郎さん

監督・脚本 假屋 啓一郎先生
撮影・編集 佐藤 哲郎さん
主演 永井 里奈さん(写真右)
河野 愛利さん(写真左)
出演 紙屋中全校生徒、教職員、
保護者、卒業生など

紙屋中学校では、文化祭の出し物として全校生徒出演の映画「あえてよかった」を制作。監督・脚本は同校の假屋啓一郎先生。先生が映画制作を通して生徒に伝えたかったことは……。

紙屋中学校文化祭。体育館のスクリーンに映るのは、全校生徒が出演する自主制作映画「あえてよかった」。上映が終わると大きな拍手が湧き上がった。

「コツコツ積み重ねれば最後には、いい結果がついてくることを生徒たちに知ってほしかった」と假屋先生は映画に込めたメッセージを話す。撮影は、8月から約2カ月間ほど行われた。ロケは10回を数え、学校を中心に、のじりこびあでも撮影。全校生徒のほか、教職員、保護者や卒業生も出演した。「初めは、みんな緊張してセリフがカタコトだった。本当に映画なんて作れるとは思っていませんでした」と主演を務めた永井さんは振り返る。

監督・脚本は、同校假屋先生が担当し、撮影・編集は宮崎市在住の全国のプロ・アマが競うエディロールビデオフェスティバルでグランプリを受賞したことがある元学校事務職員の佐藤哲郎さんが手がけた。2人は12年前、共に延岡市の北浦中学校に赴任していたとき、映画を共同制作した経緯がある。今回、仮屋先生が佐藤さんを誘い2本目の映画を作ることになった。

映画製作は簡単なものではない。8月は雨が多かった。また、学校が始まり9月には学力テスト、他にも部活動などが重なり、計画通りに製作できなかった。しかし、どんな状況でも生徒たちは映画製作を楽しんだ。鉄子役の河野さんは「10回以上NGを出してしまったこともあった。みんなに迷惑をかけてしまった

が楽しい思い出」とはにかむ。映画が完成し、文化祭で観たとき「うれしいのはもちろん、達成感とやれば何でもできるんだという自信がついた」と生徒らは声を揃える。「一緒に苦労し悩み、楽しむ。苦楽を共にしてできた友は宝。人とのつながりが大切

だということを学んでもらえたことがうれしい」と假屋先生は生徒の成長を喜ぶ。先生が伝えたかった思いは、生徒の胸に刻まれたことだろう。学校を卒業し、大人になってもこの2カ月間の思い出と育まれた友情は一生の宝になったに違いない。

コツコツ積み上げ映画完成 苦楽を共にした友は宝

